



京都支部委員新年の抱負

大館和郎（京都学園大学）

担当：支部長、事務局長

新年の抱負としては月並みですが、読書の幅と量を可能な限り増やしていきたいと思えます。最近、仕事からみの読書の比率を増えてきて、遊びの部分が減ってきているのですが、これは余り良くない傾向です。植物でいえば、土壌がやせていくようなものではないでしょうか。仕事と遊びという二分法に余りとられることはしたくないのですが、うまい言葉が見つかりません。非常に抽象的な言い方になりますが、日々、新鮮な発見をもたらす活動を維持していくことが重要ではないかと思っています。

仕事からみでいえば、図書館関連の施設を積極的に見てまわりたいと考えていますが、仕事に直接関連づけるといった構えたかたちよりは、もう少し肩の力を抜いたかたちのものが性にあっていきます。こういうことは楽しみながらしないと長続きしません。むしろ時間の捻出をどのようにするかということの方を考えてしまいます。3年ほど前に京都大学を退職された篠原さんが、1ヶ月ほど東京にウィークリーマンションを借りて、気の赴くままに暮らしたことを、支部報（No.192）に書いておられました。あのような事は、今の私には無理ですが、あの文面から漂ってくる気分というかスタンスというものに近いものを持っていたいと思っています。

それからもうひとつ考えていることは人的ネットワークです。これも仕事からみで考えるのではなく、結果として仕事とつながればそれも又良しというスタンスで、異業種交流といったかたちで実現できればと考えています。新年の抱負ですから、好き勝手なことを書いてもいいのですが、余りに非現実的な事を書く気はしないので、実現できるかも知れないといった程度のことには止めておきます。もちろん、単なる願望で終わるかもしれませんが。


[目次]

京都支部委員『新年度の抱負』	…	1
本の紹介 第5回 大館 和郎	…	5
京大図書館史こぼれ話 その六 廣庭 基介	…	7
会費納入のお願い	…	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

井上敏宏 (京都大学)	担当: 支部報編集・印刷
<p>支部報編集委員から</p> <p>最初にこの支部報の編集をさせていただきましたのが、207号(2002.9.15/10.15合併号)でした。支部委員2期目、引き続き京都支部報の編集を担当させていただきます。207号の編集後記にも「読みやすい紙面づくりを心がけていきたいと思います」と書きましたがその後、如何でしょうか。皆様よりのご意見、ご感想もお聞かせください。</p> <p>いまどきのWebページ等と違って「紙に印刷する」ということは紙面数が非常に重要になり、実は毎回ハラハラしています。ページが奇数になる……。原稿が足りない……。それにこのところ発行の遅れが目立っています。皆様には大変申し訳なく思い、今後できるだけ定期的な発行を心がけたいと思っております。</p> <p>しかし、そのためにも皆様から豊富に原稿をお寄せいただくと大変助かりますので何卒、宜しくお願い致します。</p> <p>以前、数珠つなぎのコーナーにも書きましたが私は文章というものがあまり得意ではありません。この支部報の編集もレイアウトなどは良いですが文章の校正などはいつも四苦八苦しています。今まではいつもお忙しい呑海さんに頼りきっていましたが、今回から進藤さんにも新たに編集に加わっていただきます。心強い限りです。おふたりのお力があれば、充実した支部報がお届けできるのでは?と思っております。</p> <p>では本年も宜しくお願い致します。</p> <div style="text-align: center;">  </div>	

進藤達郎 (京都大学)	担当: 『大学の図書館』編集委員、支部報編集・印刷
<p>新年の抱負</p> <p>昨年4月に図書館員となったばかりのわたしにとって、2003年は初めての経験の連続でした。職場では先輩方に助けられながら、なんとか目の前にあることをこなすのに精一杯でしたし、職場外でも、学生だった時とは違う、図書館員としての立場からいろいろな集まりに顔を出し、多くの方とお話をさせて頂きました。それは非常に意義のある経験ばかりでしたが、その分じっくりとものを考えたり、何かを学んだりという時間が少なかったように思います。</p> <p>今年は、まずは仕事をきちんとこなすことが大前提ですが、もっとじっくりとものを考える時間、学ぶ時間を取りたいですね。興味のおもむくままにやってきたことをすこし整理してみようかと思っています。とりあえず、買ったまま読まずに積んである本をひとつお読みするところから始まるでしょうか。</p> <p>大図研に入ってまだ数ヶ月なので、活動のサイクルをまだつかめていません。編集関係を担当していますが、なんとか校正が終わったと思ったらもう次の号の準備が始まっていて、そのたびに慌てているという状態なので早く慣れたいところです。また、支部報のほか「大学の図書館」の編集にもかかわることになったので、できるだけいい誌面を作れるようにいろんなアイデアを出していきたいと思っています。支部報、もっと厚くならないかなあ……。みなさん、ご投稿をよろしく願いいたします。それと最後に、原稿の締切を守ること!これが実は今年最大のテーマかもしれません。昨年は度重なる原稿の遅れで、編集の方に大変な迷惑をおかけ</p>	

しましたし (実はこの原稿も締切を過ぎてます)、ほんとうに気をつけたいものです。
いろいろ書いてしまいましたが、みなさま、今年もよろしく願いいたします。

辰野直子 (京都大学)

担当: 研究企画、HPとML担当

新年の抱負 -昨年一年をふりかえりつつ-

昨年は図書館職員一年目の年でした。4月に京都大学に新規採用となってから、早いもので10ヶ月近くが経ちました。当然ながら何もかもが初めての経験であり、戸惑いもあり失敗もしつつ、でも楽しみながら仕事をしてきたような気がします。

私が図書館 (の仕事) に興味をもったそもそものきっかけの一つが、自分がこれまで利用してきた図書館に不満をもっていたことでした。それは、単に建物としての図書館が古い汚い使いにくいといった不満から、図書館のサービスに対する不満もありました。なぜ求めているサービスをしてくれないのか、自分が必要としているモノ (情報) に辿りつくまでにこんなに手間と時間がかかるのはなぜか、職員の応対にサービス精神 (?) が無いのはなぜだろう (図書館の仕事はサービス業では?)、等々。実際に図書館で働く立場となって、利用者が求めるサービスそのままを全面的に行うことは、確かに難しいということも分かりました。そして、つついカウンターでの対応が雑になってしまうこともあったように思います。ただ、一利用者としての図書館に対する不満が図書館で働くきっかけとなったのですから、利用者の立場になって考えるという姿勢は常に持ち続けたいと思います。

そして昨年は、京都市民一年目の年でもありました。京都は“古きよきもの”があちこちにあって、また同じ場所も季節ごとに違った表情が楽しめるまちだと感じられます。初めて京都で過ごした秋は、市内のお寺や神社に紅葉狩りにでかけました。今年は、冬、春、夏、秋、それぞれの京都のよさをもっと堪能できたらと思っています。

そして最後に、昨年は多くの方々と出逢い様々なことを学ばせて頂いた一年でもありました。今年は学ぶ一方ではなく、得たもの・考えたことを少しずつでも還元していけたらと考えています。今年も多くの方々と、そして新しいこととの出逢いを楽しみにしています。そして、支部委員として、“出逢い”の場を多くの方に提供できるような企画を考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

村上美代治 (龍谷大学)

担当: 組織

京都支部委員としての抱負

今年度も引き続き京都支部委員として組織を担当させて頂くことになりました。京都支部では、この1年間に退職や人事異動によって退会された方がおられる一方、新たに会員になられた方もおられ、結果として微増となりました。しかしながら、今後も退会される方がおられると思いますので、引き続き会員の維持・拡大と組織基盤の確立につとめていきたいと思っています。とりわけ、設置母体を問わず、若さと活力に満ちあふれた方の入会に努めていきたいと思ます。会員の皆さまも会議や研修等で他大学の図書館員と親しくなられる機会がありましたら、是非とも入会を勧めて頂きたいと思っています。

さて、組織を担当していて最近感じることは、図書館界に限らず労働組合をはじめとする各種団体への結集が弱くなってきているように思います。日本図書館協会が毎年実施している図書館調査 (『日本の図書館』) によれば、大学図書館の場合、2002年度は前年度に比して専任職員はマイナス2%、非常勤・臨時職員は1.9%増で、結果としてマイナス56人という結果にな

っています。業務委託や派遣職員については調査対象になっていませんが、専任職員をとらえれば、各館ともに別の採用形態の導入、すなわち非常勤・臨時職員の採用、あるいは自然減による未補充の結果、専任職員は減少してきているのではないかと思います。数字の増減のみで単純に評価することはできませんが、人員減も一つの要因ではないかと思います。

このような状況のなか、大学図書館を取り巻く環境はますます厳しさを増すことが予想されます。図書館運営においても、現代の大学図書館に合致した経営的センスが求められています。そのセンスを発揮できる人材の育成が必要になってきています。職員の流動化のなかでサービスの多様化と高度化に依っていき使命が図書館に求められています。図書館員に求められる任務・役割が高まるなか、どのような形でもって人材養成をおこなっていけばよいのでしょうか。専任職員を業務委託や派遣職員に切り替えて運営している図書館からの報告では、専任職員はマネジメント能力を備えていなければならないと説いていますが、どのようなプロセスで養成しているのか不明です。是非ともその具体的な説明を聞きたいと思っています。

私は雇用形態の多様化や図書館員の削減には非常に大きな問題を孕んでいると思っています。図書館界では、どこの職場とも仕事に余裕がなくなっており、個々人の繋がりも希薄になってきているのではないかと思います。しかしながら、大学図書館が組織として諸課題に対応するための改善に取り組むためには、雇用形態の相違を乗り越えて全職員のレベルアップをはかっていく必要があると思います。そのためにも、情報の交換や研修を通じて組織全体のサービス向上をはかっていく必要があります。

京都支部では、従来、現場に密着した形でもって図書館員の力量形成に向けた企画をしてきました。今後も継続的におこなっていきたいと思っています。大学改革の主要課題に図書館が掲げられるようにするためには、図書館現場にいる私達がリーダーシップを発揮しなければならないと思います。そのためには、個々の図書館員が大図研を含めた図書館関係団体に積極的に参加・結集されることが大事であると思います。本年度の役員として、是非とも京都支部の活動にご理解とご指導をお願いします。

吉田誠 (京都工芸繊維大学)

担当：財政、HPとML担当

昨年はひじょうに不本意な一年だった。心身ともに故障が続き、昨秋には肩の手術、療養の関係で一月も入院するなど、職場に多大な迷惑をかけてしまった。また、大図研のサイトもリニューアルしたまではよかったが、更新が疎かになることもあった。したがって今年は図書館員云々言う以前に、社会人として仕事をできるだけ健康を維持すること、これを第一の目標としたい。

ただ、無事これ名馬、これをもって、おそらく若手に属するであろう自分が最良の目標とするには、少々覇気に欠けるような気がしないでもない。よって、もう一つ何か目標を考えてみよう。正直なところ、今の私にとっては、無事これ名馬、それもそう簡単なことではないのだが。

さて、話は変わるが、図書館は本を貸すだけのところではない。言うまでもないことだが。情報を蓄積、整理加工し、利用者のニーズを把握し、それにかなる情報を提供するところである。しかし、個々の図書館員がすべての利用者のニーズに対応できるような知識を持つことは不可能だ。ただ、図書館のリソースはその蔵書に限られることはなく、人材もまた、貴重なリソースである。個々の図書館員が己の得意分野を持ち、その知識をネットワーク化することにより図書館として提供することで、利用者のニーズにもより細やかに対応できることになるだろう。

では、己の得意分野を何とするか。私は著作権に興味を持っている。興味を持っているだけでなく、得意分野にしたいとも思っている。著作権は今、デジタル化、ネットワーク化の波

に翻弄され、中には著作権という概念が消滅するであろうと言う論者もいる。法制度を見ても、デジタル化に対応できるようなドラスティックな改革が必要とする論者から、現行の法制度の拡充で対応できるとする論者もいるなど様々だ。所有権の観点からは、知の共有を掲げパブリックドメイン化を志向する流れもあれば、財産権擁護の立場から、より強制力、拘束力をもたせたシステムの構築を志向する流れもある。著作権制度はまさしく変容期にあり、その動きは混沌としている。

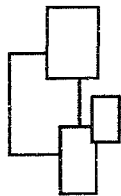
図書館が扱う知識、情報には著作権が必ずついて回る。私は大学図書館を含めた学術コミュニティが今後どのように著作権を考え、向かっていけばいいのか、様々な議論を整理していくことから始めようと考えている。昨秋の入院時にも、著作権関連の本を何冊か読んだ。もっとも、今後の知的財産を考える上で欠かせないといわれているレッシング教授の二部作には手がつけられなかったのだが。いずれ書評という形でこれらの本についてご紹介できれば、と思っている。

*紙面の都合により以下の委員につきましては次号に掲載致します。

赤澤久弥 (京都大学 担当: 研究企画、HPとML担当)

呑海沙織 (京都大学 担当: 全国委員、研究企画、支部報編集・印刷)

連載『本の紹介』第5回



『情報検索のスキル』(中公新書) 三輪眞木子 著

大館 和郎

この本はタイトルから想像されるよりは、はるかに広い範囲の領域を取り扱っている。情報学や認知理論のエッセンスをコンパクトにまとめた上で実務にどのように生かせるかの事例も豊富に紹介している。タイトルが地味すぎて損をしていると思う。本書のねらいは「はじめ」の中で次のように述べられている。「未知の問題への取り組みに求められる情報の獲得と新知識の創造、問題解決の重要な要素と考え、その全体を情報問題解決プロセスとしてとらえる。そして、情報問題解決に必要な能力として、情報スキルと自己効力を取り上げる。」

最初に、認知科学での立場から「情報」の定義を「メッセージの受け手の知識に変化を及ぼすモノ」としてとらえることが提示される。また「情報」と「ノイズ」という対のとらえ方がしめされている。受け手が「情報」とみなさないものは「ノイズ」として無視されるが、受け手が何を情報とみなし知識に取り込むかは、受け手の知識、理解力、関心、といったさまざまな状況によってちがってくるというようにダイナミックにとらえることが重要である。次に人間にとって情報を探す行為は生きることと同義であるという観点のもとに情報行動論が展開されていく。

ここでちょっと脱線するのを許してほしい。というのは、本書の内容が具体例の説明にどこまで有効か、試してみたいからである。

この本を読み始めていた時に、たまたまNHKアーカイブス(過去の番組を再放送している)で「刑事コロンボ ～別れのワイン～」(1974年(昭和49年)6月29日放送)を見た。これが面白くて、深夜にもかかわらず終わりまで見てしまった。物語は次のようなものである。「ワイン工場を経営するエイドリアンは、工場売却をたくらむ義弟のリックの殺害を決意する。彼はリックを殴って気絶させ、窒息死させるために自分のワイン倉庫の中に閉じ込めエアコンを切って放置する。その後、スキューバダイビング中の事故を偽装して完全犯罪を成立させようとするが、たまたま殺人の日が季節はずれの猛暑だったためにワイン倉庫内が高熱となり貴重なワインコレ

クションがすべて酸化してしまったことが逮捕のきっかけとなる。コロンボはワインコレクターを高級レストランに招待して食事とワインを振る舞うが、ワインコレクターは食後にサーブされた大変貴重なポートワインが高温の場所で保管されたために酸化していることに気付いて激怒する。その微妙な味の劣化は彼にしかわからない。ところが、その貴重なポートワインが彼自身のワインコレクションの中からコロンボがこっそり持ち出したものであると気づき、彼は自分が犯した犯罪によって自らのコレクションに与えた致命的なダメージを知るのである。」(坂上仁志氏の Web Site の【映画にまつわるエッセイ集】「出会いのワイン・別れのワイン」から <http://www.d1.dion.ne.jp/~hsakagam/essey7.htm>)

「コロンボ」シリーズの常として視聴者には犯人が誰か初めからわかっている。したがってコロンボがいかに犯人を追いつめていくかが見どころになる。コロンボにとって犯人を逮捕することが問題解決にあたるが、犯人の手がかりになる情報をいかに入手するかを情報行動論上から見ていくとどうなるか。本書では情報入手方法のタイプを(1)無意識の情報取捨選択を「環境モニタリング」(新聞や雑誌を読む、テレビを見る、電車の吊り広告を見る、うわさ話に耳を傾ける)、(2)役立つ情報を偶然見つけることを「情報との遭遇」(積極的に探していたわけではないのに、役立つ情報を偶然見つけること)、(3)目的のある情報探しを「情報問題解決」と呼んでいる。

リックが溺死したとされる時刻の天候をコロンボは執拗に調べる。町のバーでコロンボが客に当時の天候を聞きまくるが、誰も覚えていない。この場合、当時の天候は後々まで記憶しておくべき「情報」とはみなされず、「ノイズ」として忘却されてしまうわけだ。しかし、コロンボは、偽装事故の重要な手がかりとしての「情報」とみなすのである。結局、コロンボは気象予報局から、当時の天候は雨であったことを聞き出す。雨の中でスキューバダイビングするのは不自然であるとコロンボは考える。現場に放置してあった車も雨にあたった様子がなく、コロンボは事故死に疑問を感じる。犯人証明という目的があって情報を探す場合(「情報問題解決」)、途中で予想外のことに会う場合が多く、成り行き任せの状況的行為の連続となることが多い。ある現象が状況の変化によって意味(この場合、犯人証明の手がかりとなるという意味)をもったり、無意味になったりするわけだから、コロンボはなにげなく見聞きしたことや(「環境モニタリング」)、たまたま出会った出来事(「情報との遭遇」)も事件解決の手がかりになるなら見逃さない。

ながながとコロンボについて触れてしまったが、ここまでのところは、本書の第1章「情報と問題解決」の中で述べられていることがベースになっている。この後、第2章「情報探しと構造化される知識」では、情報探しのプロセスの中で情報ニーズが多様に変化し、プロセスが進むにつれて強まっていくという特徴を指摘し、次に最もマイクロレベルである情報検索、よりマクロレベルである情報探索、そして最もマクロレベルである情報問題解決を、探し手の立場から見たプロセスとして概観している。次の第3章「自己効力感」では問題解決の成功に当事者が自己効力感を持つことが必要不可欠であることが指摘されている。本書の説明によると、自己効力感とは、「人間が一定の成果を生み出す能力」であり、自己効力感とは「自己の能力への確信の程度」である。第4章「情報行動のパターン」では、人間の情報行動の背後にあるさまざまな要因間の関係を考察している。第5章「情報スキル」では、問題解決スキルを身に付けた人物がどのようにして情報を獲得し問題を解決するのかについて、次に、生きる力として求められる情報リテラシーとしての情報スキルについて考察している。最後に情報リテラシー教育の場において情報スキルの育成で成果を上げるためには、内外の情報行動研究の成果としての理論やモデルに基づいて、問題解決の枠組みに即した情報スキルを開発するための教育カリキュラムを創造することが求められるとしている。

本書の叙述の理論的枠組みを形成しているのは学習心理学者のバンデューラの「社会的認知理論」である。この理論の中で、人間の日常行動の目的を、未来の望ましい出来事である「遠隔ゴール」と、現在進行中の行為の目的である「直近ゴール」とに区別し、前者が後者を生成し、後者が現実の行為を決定するという多重ゴール・モデルを提示している。著者はこの理論を情報問題解決プロセスに当てはめて、「学位や単位を取得する目的で、論文やレポートを書く。」という問題解決ゴールが「遠隔ゴール」であり、その「遠隔ゴール」が生み出す情報行動の引き金とし

ての情報ニーズを満たすことを「直近ゴール」であるという仕方で説明している。

本書では、このほかにも情報探索や問題解決のモデルが多数紹介されているが、図書館員にとって参考になるような情報行動についての考察が多い。例えば、自分のために情報を探している際の情報行動が、顧客の依頼を受けてサーチャーとして検索している場合の情報行動とはかなり違うという指摘だ (p122)。自分のために情報を探しているときには、検索中にコンテンツをブラウジング (browsing = 表示された検索結果に目を通す) しながら取捨選択し、またコンテンツを読んでいる際に役に立ちそうな語句に出会うと、それをキーワードとして、さらに検索の範囲を広げたり、ブラウジングで得た新たな視点やアイデアを手がかりに、途中から視点を変えて検索を続けるのに対して、顧客のために情報を探す図書館員やサーチャーは、コンテンツを読まなくてもタイトルと見出しを見ただけでそれが顧客の依頼条件を満たしていたかどうかを判断できるので、ブラウジングにほとんど時間をかけない。なぜなら、図書館員やサーチャーの情報探しは、依頼人が指定した条件を満たすデータを見つけ出すことを目的としており、依頼人の問題解決ゴールとめざしているわけではないとしている。著者は、別の箇所では情報コンサルタントについて触れているが、図書館員やサーチャーの情報行動と情報コンサルタントの情報行動は違うようだ。長年にわたってコンサルタントとして内外の企業や公的機関の問題解決を支援してきた著者によれば、「情報コンサルタントの仕事は、顧客に代わって求められた情報を探し出すだけでなく、顧客とともに情報問題解決に取り組み、顧客の目的を達成するために必要な情報は何かを顧客と一緒に考えることなどである。」(p42) このほか、情報行動の背後で作用しあっている知識や思考や感情の絡み合いについて触れているところなど面白く読んだ。

本書にはこのほか、情報サービスや情報リテラシー教育についての積極的な提言など図書館員向けの内容が多いが、基本的には一般の人に向けての情報問題解決スキルの習得ガイドというべき性格をもっている。しかし新書版というコンパクトな分量にわりには中身が濃いので、随分、得をした気分させられた。

おおだて かずお (京都学園大学図書館)

京大図書館史こぼれ話 その六

京大初代図書館長島文次郎博士と「老いらくの恋」事件

廣庭 基介

川田順夫人俊子の島博士夫人椋乃への眼差し 2

(筆者敬白) 前号の最後が「注：1」の途中でしたので、本号は「注：1」の「続き」からです。

「注：1の続き」(廣庭注：椋乃さんは高井健次郎氏と明治42年(1909)に結婚、明治44年一子・一郎をもうけましたが、大正5年(1916)健次郎氏病没、以後椋乃さんは女手一つで一郎氏を育てながら、大正9年(1920)29歳になって京都女子専門学校国文選科に入学、大正12年卒業と共に、文部省中等教員資格検定に合格し、母校の附属高等女学校教諭に就任していました)

(注2)：夕陽居とは、川田順が昭和14年に妻を失って、神戸の御影の自宅を売却して、京都北白川の人文科学研究所の東裏の養嗣子・川田周雄宅内に離れを建てて約8年間住んだところに付けた住居の雅号です。

(注3)：「弔歌一首」とは、島椋乃氏の七回忌の法会への招請を受けた和歌の師匠であった川田順が、所用のため参加できなかったため、代わりに和歌を一首認めて贈った歌のことです。

「島椋乃夫人のみたまの前にささぐ この道はさびしくなりぬいつよりか博士夫人のあしおともせず 銀閣寺道にて昭和辛丑初秋 川田順 八十叟」と記した色紙で、その後も島博士邸の

表座敷に円形の額に入れて掲げられていました。

部外者による島樫乃夫人の人物評

次に京都帝国大学附属図書館初代館長島文次郎博士の夫人・樫乃氏を知る人の夫人評を二つ紹介しましょう。第一の筆者は元京都女子大学教授・岡本隆男氏で、文章の題名は『牧愛舎雑筆(二)-----心の絆は切れない-----』と題する随筆です。掲載された印刷物は雑誌『心』第7号(1985年6月号)で、この雑誌は元京都女子大学附属女子高等学校・同中学校教諭で、後に関西大学教授に就任された藺田香融氏が主宰された「こころの会」の機関誌です。岡本隆男氏は大正15年(1926)京都大学文学部国史専攻を卒業し、神宮皇學館で教鞭をとった後、昭和22年5月まで京都女子学園の高等女学校、女子専門学校、女子大学において教諭・教授を務めた人です。現在も御健在なら100歳を越えておられると思われます。

【p.27:「この道はさびしくなりぬいつよりか 博士夫人のあしおともせず 川田順

冒頭の短歌は、昭和四十二年島樫乃さんの令息高井一郎さんによって編集発刊された樫乃さんの歌集「芳梅」の巻頭に写真版で載せられた、彼女が歌の道で師事していた川田順のものである。銀閣寺から法然院、法然院から靈鑑寺、靈鑑寺から疎水べりに沿うて、大豊神社の鳥居前に東山の裾を這うようにつづくこの細長い道を、川田順は島樫乃さんの面影を心に描いて歩きながら詠んだものと思う。「この道」はわたしにとっても、学生時代をこめて三十余年間つづいた京都での生活のさまざまな思い出のまつわる、終生忘れられない小径である。大正末期から昭和の初期にかけて、わたしのささやかな寓居は、若王子から桜谷、桜谷から宮前へと転々と移りかわったが、田舎育ちのわたしは、この鹿ヶ谷一円^{みやま}の土の香と軒を連ねた農家と随所に見られる「京の田舎」の風情に心引かれてか、長く住みついてしまったのかも知れない。とりわけ、私がかれこれ二十年近く住み馴れた宮前の家が好きだった。時折、島(文次郎ママ)博士ご夫妻が玄関に立たれたのもこの家だった。(中略)わたしが初めて島先生にお会いすることができたのは、大正十二年大學へ入って、自分の専攻以外の英語の授業を受けてからである。当時先生は厨川(辰夫ママ、廣庭注:厨川白村のこと)教授とお二人で、授業を担当しておられたが、(中略)島博士夫人樫乃さんと知り合いになったのは、わたしが京都女專の教壇に立つようになってからのことである。

(次号へつづく)

ひろにわ もとすけ (元京大図書館員)

◆◆◆会費納入のお願い◆◆◆

新春の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。毎号、大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしていますが、残念ながら会費の納入率は依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。既に新会計年度に入っていますので2003年度の会費納入をお願いします。

またすでに2002年度(大図研会計年度2002.07~2003.06)は終了していますが、納入率は六割程度です。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願いいたします。